立教大學新聞

毎月一日・十五日二回發行
一部金[illegible]
廣告料[illegible]
發行兼編輯印刷人 玉井俊夫
發行所 立教大學新聞學會
電話 小石川 一九一〇番
振替 東京 七〇八五二番

今度はアメリカへ留學を命ぜられる

歸朝早々の大野教授

本紙前號に於て報導した如くドイツに留學中突然歸朝を命ぜられ倉皇として歸國された大野教授は、大學の講壇に立たず結局更に二三年の豫定で今度はアメリカへ留學される事に決定した九月上旬出發の筈で目下準備に忙殺されて居られるとの事である。其の間には又準備もあるが學生から待たれた教授の講義は尚、當分聽く事が出來ない事になつた。がドイツに於てハインリッヒ・クーノー、カール・デイール其他に就て研究を成し深くマルクス主義を研究された教授が資本主義萬能のアメリカに於て殊に學問的にはベルリン大學に比して遙かにレベルの低いオハイオ大學に入學して何物を得て歸朝されるかは注目に値する

千葉教授訪問記に就きて

本紙前號所載千葉教授に關する記事は其の內容に若干の相違あり、千葉教授は甚だ迷惑を感ぜられしとの事なれば、右の文を取消し、千葉教授及び關係者に謝す

新聞學會編輯局

數千の聽衆に多大の反響を與へた

辯論部の北陸遊說

既報の如く本大學辯論部の北陸遊說は根岸、楨原、瀧本、小島の諸教授を先頭に清水、江尻、德永、要、正世、平野の諸君は去る七月十一日先づ富山市に於て開催、折からの雨をついて參る者五千餘、根岸楨原兩教授の火の如き熱辯について瀧本博士は我國現代の農村問題と題して農村の衰微の已むべからざる現狀につき縷々として其の改善策を說き、多大の感銘を與へた。翌十二日、金澤市に於ても亦雨天にも拘らず二千餘の聽衆堂にあふれ、立教大學の名聲と共に當日の講師の學識は深く北陸の地方に響いた。尚一行は十三日夜教授學生共に母校の校庭に集まり辯論部の萬歲を三唱して解散した。

滿洲遠征に

野球部

歡送裡に出發

本校野球部は去る四日午後八時半の東京驛發列車で滿洲遠征の途に上つた。一行は田邊忠男教授、永田主將以下選手十七名にして大連、奉天、長春、ハルピン等に轉戰し約一ヶ月後歸京する筈。一行の東京出發に當り先輩諸氏及學生有志諸氏の盛大なる見送りあり。

新學期早々又一騷動か……

豫科二年の學期試驗から各學年も紳士待遇を要求

是か否か試驗監廢止

豫科商科二年は去る七月上旬施行の學期試驗に際し齋藤教授擔任の歷史試驗に學校側の失態から突然一致して受驗を停止し種々交涉の末、當局の陳謝、齋藤教授の辭職、學期試驗の延期となつて一應解決した事は既報の如くであるが、其の延期された試驗は九月十五日より試驗監の監督なしに行ふ事に決定されたのであるが、是を聞き傳へた豫科及び本科學生は、豫科二年に紳士的態度を信賴して試驗監無しの試驗を行ふならば吾等にも同樣の待遇をなすべしとして二學期よりは大學あげて試驗監を廢止するようにと意氣まいて居る。

當局は確に言明した

今更違約は出來まい

豫科二年の委員某君は語る

九月十五日からの試驗に就いては杉浦學長阪口豫科部長其他の幹部教授列席の下に、學生の紳士的態度を信賴して監督をつけないと言明されたのです。僕等の方でも又、皆其の積りで居ます、如何に將來に惡例を殘すからつて、あれ程の約束を今更變更は出來ますまい。若し約束が違へば恐らく皆一致して受驗しないかも知れません

云々と意氣當るべからざるものがある、一方學部二年及び三年では新學期早々クラス會を開いて充分調査の上場合によつては學生大會を開いても一部にのみ不公平な態度は許さないと意氣込んで居るので、事は如何に發展して行くか注目に値する。

山靈の威容に浸りつゝ、山岳部の近況

山岳部の活躍は夏に於て白熱點に達する、若き人々は山の誘惑にたまらない愛着を感じつゝ、山靈の威容に心ゆくまゝ浸らんと夫々思ひ思ひの山々へと目ざした事だらうが本學山岳部も本年は之を十三班に分ち大規模な計畫を立てた事は既報の通りである、本紙がうけた通信は第十三班で上高地キャンプ生活を無事に終り無限の涼味と靈威を感じつゝ下山した由である

年は若くも意氣で本會議を其儘に

國際聯盟協會各學生支部が協調會館に模擬總會の催し

帝大、早大、立大其他都下十數校より成る國際聯盟協會學生支部聯合會では

國際聯盟摸擬總會

を今秋十月芝公園內協調會館に開催するに當り今春以降、是が準備に就き、種々準備委員會を催したる事は本紙の逐早く報導せるところである。而して最近準備委員會々議に於て決定せられたる事項は左の如し。

（一）理事會の設置の件
（二）入場券の件
（三）顧問を設くる事
（四）日本大學を總會に加盟せしむるの件

外三件にして則ちその各項の內容を聞くに（一）は決定總會は先たつて理事會開催の要ありと認め、參加校全部を理事會に參加せしめる事、理事數を十三國とする事

理事會開會の期日を

九月二十六日午後二時とする事に決定。（二）は各支部の入場希望數を事務局へ通告し、事務局はそれにより入場券を配付する事とし、殘餘ある時は一般希望者に頒つ事と決定（三）多數贊成可決（四）可決　外三件も原案可決をみた。而して大會開催期日は十月十日・十一日の兩日にして時恰も萬國郵便會議の東京に開催せられるあり世界各國の是等代表者も模擬國際聯盟總會に招待しては如何との議あり。未だ是が決定を見る迄に至らざれども大體に於て異議なく可決承認せられるべき模樣である。議題に就ては、ジュネーヴに開催せられる本會議の問題たる平和議定書

獨逸聯盟加入問題

阿片問題および、東カレリヤ問題ダニューブ問題外二十餘問題にして學生支部が是等議題に如何なる處置をとるべきかは最も興味ある問題である。而して是等決定事項は直に本部に通告せらるゝとか。

模擬總會に就き關係者の一人は『何しろ一國を代表するのであるから大變な事です。簡單な問題ではないですよ。第一議題が議題ですからねえ。本校の受持つ國は?それは五ケ國十八人です。參加校は都下の大學、專門校のみ十二、三校です。國は現在の聯盟國全部、五十五ケ國です』と語つた。因に本校が受持國家及代表氏名は左記の如くである。

國名	代表氏名
スペイン。	江尻登、柴田守雄
ポルトガル。	大庭進、空閑實徹
キューバ。	川口太治、大城勝正
ガテマラ。	清水清、松岡榮五郎
ドミニカン。	八木雙、杉謙晃

尚總會の外理事會、委員會を設けて理事會では議題の準備、委員會では決議案を作成、總會にかけて決定する順序である。而して國際聯盟學生支部中の紅一點東京女子大學も參加する筈である。而して今回の催しは相當の効果あるものと斯界では看てゐる

身邊漫語（四）

藤井隆太郎

◆ ◆

現代はヂャーナリズム萬能の時代である。否、吾々の解する所では、最早、ヂャーナリズムは、其の長短兩面を遺憾なく暴露して、何等かの新展開、新飛躍をせねばならなくなつてゐるのではないかと思ふ。併し今日、新聞紙が隆々たる勢力を把握するに至つたのは左程遠い歷史が殘されてゐる譯ではない。隨つて新聞通信事業の發生も之と正比例してゐねばならぬ。巴里のアヴアス通信社は一千八百三十五年に創立され、佛蘭西の各新聞社に各種の材料を供給した。併し汽車、電信等の交通機關もない當時のことだから。日本の飛脚と同一の不便があつたのは勿論である

◆ ◆

アヴアスに次で起つたのは有名なロイターである。之は一千八百四十九年、矢張り巴里に於て發行されたが、先輩アヴアスの勢力に壓せられて手も足も出ず、遂に同五十一年倫敦に移轉した。ロイターは南北戰爭後、初めて今日の基礎を築くことが出來た。我國の海外通信は、合同か聯合か又はロイターの通信であるが、昨年三月頃から、ロイター通信は全部國際通信の名義の下に各新聞社に供給されることゝなつた

◆ ◆

一體世界の通信網はどういふ風に張られてゐるのかと言ふと、之は自ら二つに類別することが出來る。即ちロイター――エキスチエンジ・テレグラフラヂオ（英國）ウオルフ（獨逸）アヴアス――ラヂオ（佛國）アッソシエテッド・プレス（米國）ユーナイテッド・プレス（米國）ステファニー（伊國）ロスタ（露國）國際通信社――電通（日本）等であるが、之等は二の大きい組合を組織して、互に世界各國に通信網を張り廻し、一擧手一投足も逃がすまいと待ち構へてゐるのだ

◆ ◆

我國から言へば――の上段には國際通信、下段には電報通信が各組合に加入してゐる。右のウオルフは戰前迄は組合に加入してゐたが、今日は未だ其儘となつてゐる。而して各通信社は、豫め其の勢力圏を協定して、互に紳士的な行動を執つてゐる。例へばロイターならば本國、東洋全般、殖民地アヴアスならば本國、白耳義、殖民地希臘、スペイン、ロスタならば本國だけ、ステファニーならば本國殖民地といふ風に。そして假に希臘に革命が起ると、アヴス通信社が自己の勢力圏內たる關係から、先づ巴里では各國の通信員が其の電報を頂戴して、直に自國に轉送する。英國のロイターに此電報が到着すると、ロイターの名に變じて、自己の勢力圏たる東洋へ來る即ち日本に於ては國際通信となつて、翌日の紙上を飾ることゝなるのだ。洵に目まぐろしい程の變化ではある。反對に我國からは、東方通信などは、支那を範圍として通信を送る。又ロイター、アッソシエテッド・プレス、ユーナイテッド・プレス、ロスタ・インタナショナル、ニュース、パキプリック・レッヂャー等は何れも通信員を特派してゐるから、加藤內閣成立と言へば、時を移さず打電される

◆ ◆

昨年六月加藤內閣が成立した時桑港クロニクルには、カタオカチヨクオーが內閣を組織したと報導された。ハテ、斯んな政治家は日本にはゐない筈だがと調べて見ると、新商工大臣片岡直溫のナオハルを取違へたものらしい。內務政務次官を拗め絕つて漸く之を承服した許りの片岡サンは、僕の此店を聞いて、ニヤリとしたものである（此項續く）

朝日新聞社主催の訪歐飛行の成功を祈り

本學會より祝電を發す

東京朝日新聞社主催の國民的壯擧訪歐大飛行は去る七月二十五日朝野數十萬の歡呼湧き返る中を遠くモスコーに向つて代々木原頭を出發致しました、本學會は同じく新聞事業に關係する者として又、國際平和を主張する者として此の壯擧に多大の喜びを感じ當日左の祝電を發して其の歡送の意を表しました。

訪歐飛行の成功を祈る

立教大學新聞學會

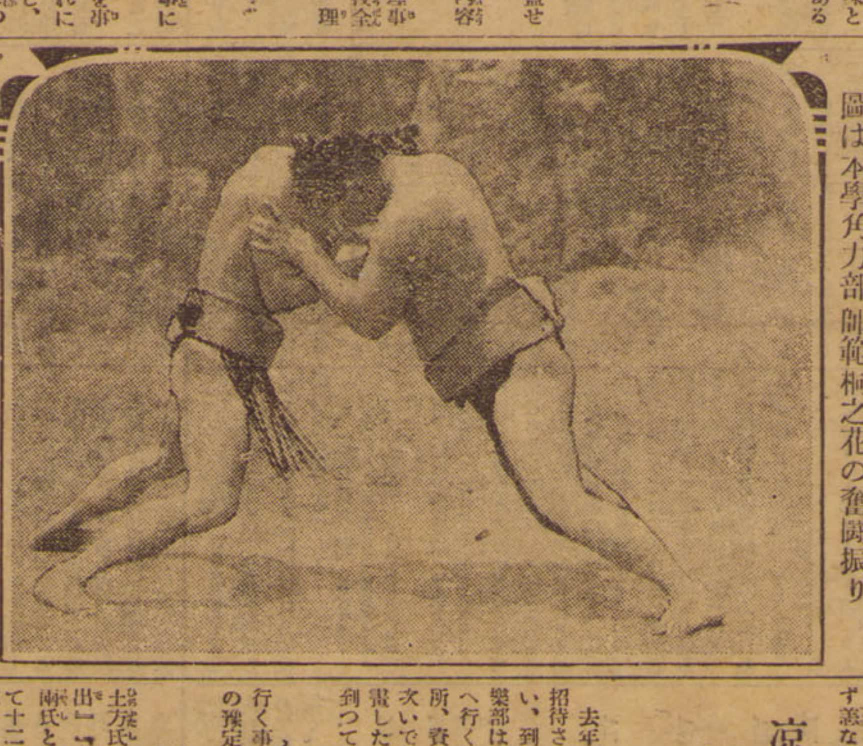
驍名を安房に馳せた角力部夏季の活躍

千葉縣富浦に合宿して

七月十日から千葉縣富浦青年會館に合宿して夏季練習を行つた部員松林主將以下十三名の人々は去る二十四日二週間の豫定を恙なく終り夫々郷里に歸省した。それについて親しく記者を訪ねられた尾崎君は元氣に語られる

此の二週間に私等は富浦青年團の好意を以て非常な効果を擧げ得た事を第一に謝さねばならぬ日課は午前中は猛練習し午後は休憩やら其他各部員の自由時間とし夜は土地の人々等と飛入勝手の稽古をした。殊に痛快だつたのは安房の角力ずきの人々で組織されてゐる素人角力と決戰して優勝し又安房第二番と誇る某君を松林主將が苦もなく土俵に倒はした事であつた。こうやつて學校を離れて生活してゐると先輩の訪れはまたなく嬉しいものだが此度も高橋、上田の諸兄の親しく御尋ねをうけた事は誠に感謝にたえない。最後に忘れる事の出來ないのは部員鶴原氏の父君から多大の御厚と御援助を賜はり何かと合宿中の便宜を得た事である玆に貴紙を通じて御禮を述べさしていたゞく」と

同部は二十四日解散式を行つたが安房の素人角力を破つた事で土地の人々には立教大學角力部の驍名を馳せたさうだ。



圖は本學角力部師範桐之花の奮鬪振り

實社會研究會商品見本蒐集

一般の寄贈を望む

實社會研究會が本年夏季休暇を利用して各地に散在する會員各自地方特產品の蒐集及び其の他研究資料の集成を爲すことは既報の通りであるが、委員金容榮氏は歸省中の餘暇の殆ど參考資料に沒頭し可成多數の品目を集め得たとの事である、尚同氏は實社會研究會の存在を以て本學の一特徵ともしたいと云ふ考へを持ち、この際には會員一同が是非とも多數の商品見本を集めて會員諸に一般學生の期待にそむかぬ樣にして貰ひたいと語つてゐる。本紙も亦此の擧に贊してゐるので一般學生諸君並に先輩諸氏其他が特別な好意を以て御寄贈下さらん事を希望する

清涼の輕井澤にキャンプ生活

本學排酒同盟の催しと岡田、廣瀨氏の近況

人生の惡は皆之れ酒より出ずと信念に燃ゆる若き人々に依つて支持される日本學生排酒同盟支部である本學排酒同盟の一行は既報の通り去る七月十七日から輕井澤に於て排酒同盟キャンプ生活に一週間を費した、名にし負ふ瀟涼の地の輕井澤に尊き信念に若き希望を輝かしつゝ靜かなる想ひに耽つた一週間の生活は決して永いものではなかつたが、効果の偉大であつた事は忘れ難いと同盟の一員は語つた、更に遠く學生排酒同盟より朝鮮に派遣された岡田七雄氏の講演は折からの朝鮮水害當時にも拘らず恙なく豫定通りの旅行を終へ七月二十二日無事大連に到着された、更に北に向つて大いに禁酒宣傳を爲すべく出發した廣瀨富士雄氏は七月十六日夜札幌着十九日午後七時半より日本基督青年會館に於て講演を爲した、演題は『兒童に及ぼす酒害』と云ふのであつたが該講演には本學神科生藤津芳男氏の應援演說もあつて仲々の盛會であつたと云ふ

署中御見舞仕候

玆に夏季の編輯を終るに當り各位の御健康を祈る

大正十四年八月

立教大學新聞學會

涼しい北海道へ演奏旅行を行ふ

漸く決定した音樂部の夏季計畫

去年の夏は北陸方面の數市より招待されて同方面に演奏旅行を行い、到る所で大成功をおさめた音樂部は、今年は最初四國中國方面へ行く積りで關係團體と交涉した所、費用の點で遂に不調になり、次いで新潟方面への演奏旅行を計畫したが是又不調となり、最近に到つて遂に大學

北海道へ出掛けて

行く事になつた、出發は本月九日の豫定で本紙締切りの當日には未だ出發の運びになつて居なかつた北海道に於ては音樂部の委員町井吉木兩君の故鄉であるのを幸ひ旭川市に於て同音樂部主催で大演奏會を開く筈で同地の新聞社其他の後援があるとの事である。尚、事情が許せば旭川のみならず附近の市町に於て

少演奏會を開き

大いに立教大學音樂部の爲に氣を吐く由、歸京は八月下旬の筈で一行は二十數名である。

劇壇覺書――其四

水乃魔鄉

土方氏の演出された戲曲は『思ひ出』『シーザー』を青山、小山內兩氏と共同演出されたものを加へて十二である。第一回の『海戰』に就ては世評の的となつて議論百出して要するに土方氏の立派な成功であつた事は既に述べた。第二回のロマン、ロオランの『狼』はやはり日本に於ける初演とか云つた樣な點の宣傳であつたがこの作品はいくら倉田百三氏がシカツメらしい理窟をつけて讚歎しても、もの古いた英雄主義精神をみせるもので戲曲としては、形式手法とも陳腐なものである。自分が賞められると、人情からでも相手のものを賞めて貸借を決濟するのは日本の文壇では最早常識になつてゐる、倉田氏いかにも積極的に進まれた丈けの態度ではある、之はとんだ脫線であるが、今は戲曲の問題よりも演出された舞臺効果の問題である。此演出で特に感じた事は配役の成功であつた、青山、汐見（當時特別加入の小堀誠は意外として）其他の役々も割合に見當がつきかけてきたが同じく特別加入の夏川靜江にジャン、マアブルをやらしたりなどした一寸微妙な思ひ付きは普通な事ではあるから賞めるにも當らぬが、殊更しかつめらしい顏して、氣が知れぬ、なぞとつめよつたりしてみる劇評家がゐた。どうでも好い事であるチャペクの『人造人間』はメロドラマ風『狼』など、全然異なつた傾向のもので近代機械文明の弊を諷した一寸目先の變つた、所謂ハシリ物であつたが、俳優は演出者の意志と共に眞面目至極なもので歌舞伎劇の完成された味を知らず築地小劇場に凝然とした信仰と興味を持ち始めた樣な若い俳優諸君には演劇としてより舞臺に展開される事件に對して、他人ならぬ、切實な問題を强調されて『人造人間』に彼自身の生活戰路を暗示されはしなかつた。至つて分り易い戲曲ではあつたが新らしいもの、持つ技巧上の粗雜さが萬全を期された用意周到な演出に於てさへ救へない處があつた樣に記憶してゐる。

『瓦斯』第一部は表現派の巨匠カイゼル丈に『人造人間』よりも技巧も確だし力強くもある、土方氏の演出態度は前者の取扱ひ方と同じであつた『瓦斯』は再演されたが前後を通じて青山氏の富豪は落付きと美しさを見せ、群集の取扱ひは初演の時の方がその動き方に効果があつた、が『人造人間』にしても『瓦斯』にしても群集を取扱ふには最も惠まれてゐる事情にあり乍ら大切な群集となる俳優諸君がまづ過ぎてゐて演出者の動き方の意志がぴつたり肉體的に生きて來ない、之は『思ひ出』に時にはずつと好くなつて効果を擧げてゐた、然し『思ひ出』の時の群集の指揮は青山氏だつたらしい、土方氏は此當時硬派難義で轉地療養中だつたと思ふ、が之は何も土方氏よりも青山氏の方が訓練が巧いと云つたわけではない。演出者としては兩氏には自ら特色がある。ピランデルロの『作者を探す六人の登場人物』は非公開として上演されたもので、土方氏の好みと一致してゐたらしく思はれたが、土方の俳優が夏期講習會以來築地に加入したもので、餘り一生懸命にやられた爲、息づまる樣な感じを受け過ぎた唯受け過ぎたと云ふ點には文句があるわけである（未完）

綠蔭小話

（二）

大澤洋三

六月も末に近い土曜日の夜を私は寄宿舍に居るKの部屋で過した事がある。Kと私とは信州の山の中の同じ中學を出て來たのである。Kは其頃詩作に沒頭して居た。彼は寄宿舍でも變り者として通つて居る男である。色の白い嚴めしい立派な顏の半分はいつも針の樣な無精鬚で蔽はれて居た。彼は鄕里の淺間山を見る樣ながつちりした男である。立教へ入つた當時彼は鄕里の洋服屋に作らせた眞黑な大きなボタンの着いた洋服を着て居て寄宿舍の委員に注意されたものである。どちらかと云へばハイカラな立教の學生の中に琵じつて彼の黑ボタンは異樣に見えたのである。彼は何事も他人に對しては寬大だが自分に對してはどこまでも嚴格だ。惡魔だつて彼を誘惑するのは仲々困難だと思ふ。彼の隣室にKと云ふ男が居る。彼は（ラクビー）の選手で誰にでも辟易する樣な男ぢやないがKに丈は恐れをなして居るそうだ。それはKが強さうだからぢやない。彼があまり丁寧で眞面目だからKの樣な磊落なスポーツマンは彼に一種の壓迫と窮屈さとを感じて辟易するのである、Kは朝起きてKがドアーの外に居ると戶をピシャンと閉めて入つてしまうそうだ。それはKには『お早う』とあまり丁寧に挨拶されるからだ。或時Kは彼等の詩の同人雜誌をKの部屋へ買つて貰ひと行つた。Kは今金が無いと告げるとKは『ハヽ、金なぞいつでもよろしいのです』と答へた、それでたうとうKはその雜誌を買はざるを得なくなつてしまつた。Kがないと云つた言葉が面白い。

『おい、俺はたうとうこんな本を買はせられてしまつたぜ。俺は生れてから一度もこんな本を買つた事はないんだ』

私はKに時々會ふ事が好だ。Kに會へば希望が湧いて來る、創作慾が湧いて來る。Kに會つて居るうちは自墮落な心なんかどつかへ影を潛めてしまふのだ。二人の話は重に藝術の話であつた、でなければ旅の話であつた。彼は時々無錢旅行をするのである。彼の體は幾日野宿をしても平氣の樣に頑健に出來て居る。彼は乞食になつても幸福な男だと思ふ――云ふまでも無くこれは彼を非常に尊敬して云ふ言葉だ――

それは土曜日の夜なので舍生の多くは外出して居て窓の灯の消えて居る部屋が多かつた。時々遠くの部屋から高い笑聲やマンドリンの音がとぎれとぎれに聞えて來た。ふと向の部屋――銀杏の木梢を通して見えるプロフェッサールームの明るい窓からビクターの舞踏曲が聞えて來た。私は窓を明けて外を覗いた。何が見えたらう!それは引き絞られたカーテンの隙から見える一組の男女の踊る姿であつた。――外は好い月夜である。銀杏の影が芝生の上に投げ出されて居た。塔の時計の針は月光の中に10を指さうとして居る。Kは電燈を消した。月光が水の如く部屋に流れ込んで來た。無踏曲は尙續いて居た。――

『それは誰だね』私はしばらくして聞いた。

『コード、ウェルですよ』それは近頃米國から來た我々の若い教授である。『女の方はあの男の友達だと思ひます。時々あの男を尋ねて來ろのです。金髮の房々した美しい女ですよ』Kは私が中學時代に彼より少し上級だつたと云ふ丈で今だに丁寧な言葉遣ひを改めないのである。

私はその時東寮の階下の明りの消えた窓にどこから來たのか青白い光の映つて居るのを見た。

『K君――君にもあの青白い光が見えるかね』

『見えます。どこから來た光でせう』

『さあ――』私はあたりを見廻したが青いカーテンの掛つて居る窓は眼につかなかつた。

『君はあの窓のある部屋へ幽靈が出たと云ふ話を聞いたかね』

『いゝえ、聞きませんね、幽靈?それははんたうですか』

彼の嚴格な顏が月光の中に鳥渡好奇心に燃えた。

寮に居ても交際の少い彼は寮に起つた出來事と云へどもあまり知らないのである。

時間空間

◆ ◆

太陽に黑點現れて或は暑く、或は涼し。

◆ ◆

諸兒幸ひに健在なりや帝大の學生等に軍事教育拍手して迎へらる

◆ ◆

內閣新生す、いつも變らないのは西園寺詣でと政黨屋の活躍のみ

◆ ◆

朝日新聞社主催の訪歐飛行大成功裡に終らんとす。是、一新聞社の事業に非ずして國民的壯擧と評し得。本學會又遙に其の成功を祈る。

校友消息

○[illegible]氏 今回左記の場所に轉居されました。[illegible]

○[illegible]三井物產株式會社上海支店に勤務中の由

暑中

海から
山から
なつかしい
故郷から
御歸りに
なつたら

スズキ・ホール

御伺

暑中御見舞申上候

暑き暑き
夏も過ぎ去り
御歸京の節は
御愛顧の程を

定評の
カフェー享樂

暑中

御伺

藥

豐島師範前
青山藥局

學藝

哲學する人

經濟科　平松五郎

私が以上に述べた事は、今にも全世界をあげてその中に沒入するが如く見ゆるマルクス主義的國家が、何等その約束する所を我々に與へるものでないと云ふ事より生れ出る。今や全世界の下層民は而して今や經濟的智識階級の大部分は數ペンスの宣傳文學に、パンフレットにリーフレットに醉はされ切つてゐる。マルクス及びエンゲルスそしてレーニンが約束した所のその美しき世界を見よ。支配なき社會、階級なき社會、國家なき社會、各人がその能力に應じて働き、その必要に應じて受くる社會。自由の社會である。ユトピヤ島の社會である。

此の實現は最早時の問題であると彼等は約束するのである。此の社會の實現は歷史的必然である。數學の公式の的必然なのである。然し私はかゝる社會はその實現過程が彼等の手に任されてある限り、遂にそれは一箇の夢にすぎないと斷言するのである。

私を目してブルブルヂョアと罵るは勝手である。然し私も亦私は資本主義國家に謳歌しきつたブルブルヂョアの如きものでない事を斷言する事の勝手を享樂することができる。私は共產社會が誕生するのを苦惱を以て見ようとするのではない。共產社會は現實の社會に比較して、實に素ばらしい世界であるに違いない。私はそれを確實に認めてゐる、がそれがマルクス主義者によつて何時我々に與へられようぞ。

私は『文明の沒落』を著した室伏高信と共に云ふのだ。現今物々しく最も美しい希望ある世界を約束してゐるマルクス派社會主義は、それがその世界に到達するまでの經路を說く時に、その最も大なる特色を發揮するのである。獨裁！如何に此の言葉の、曾ては自由の論議せられた如く、多くの議論の焦點をなす事よ。曾てそれは惡の權化とされたのであつた。而して今やそれは善の女神となりつゝある。

『學者中の學者』アリストートルに聞け、（彼は奴隷の存在を認めた事によつて、御用學者と罵られる事が屢である。然し忘れてはならない。奴隷はその當時、現代機械そのものであつた。奴隷存在の肯定を攻擊する人々は、果して機械の存在を攻擊するや否や？）彼は今の不平が革命の原因となるのを說いてゐる。そのアリストートルの抱いた理想は、富者を引下げ、貧者を引上げ、中產階級の位置に三者を平均せしめようとしたものである。而して彼は、總ての學者のうちの學者、總ての政治學國家學の基礎をなす學說をうちあてた彼は、而してヌルカスさへもその跡をそく彼は、富者を、中產階級を、貧者にまでたゝきつぶすと云ふ事、夢想だにせなかつた。階級鬪爭の今日の如く激しかつた彼の時代に、彼は無產階級の擡頭を少しさへも思はなかつたのである。

然し時代が進ふと云へば、それだけであるかも知れない。此處に於てか說かるゝものは何であるか獨裁にうちつゞいて來る政策、卽ち、大中央集權、大工業、大生產此れである。嗚呼、かくの如くして未來の世界は得られるであらうか。私は斷言する。斯くの如き制度のもとに社會は沒入して、而して何百年と繼續するであらう。大中央集權、大工業の結果、必然的に大都會が生れ出る。マルクス派社會主義者が如何に都會を罵るかを我々は熟知してゐる。其處に資本主義的制度の都會と同じく、個性の沒却、人格の喪失、而して無信仰、無神論、機械文明の謳歌があり、實に其處に、人生の本質的目的、生活の指導原理の忘却があるのである

かくの如くある限りに於て、不衞生、腐敗、犯罪、（それが如何なる種類のものであらうと）それらが都會に發生する。如何なる大政治家があらはれても、如何なる救濟政策社會政策が實行されても、此の人心のおもむく所を止める事は到底不可能であらう。斯くの如きが人間が田園を去つて都會に入つてより、何百年に渡る所の、プレトウについて云へば人間が眞理世界を離れて地上に墮落してよりの、眞理であり來つた、而してそれは都會のある限りに於て永遠の眞理であるマルクス派社會主義者が機械文明のユトピヤを說く限りに於て、私は曾て見た新聞寫眞、それは二十年後のモスコウ停車場の壯大なる有樣をあらはしたもので、その停車場の背後には雲霞の如き大建築物が、地平線上まで續いてゐるものであつたが、それと共に、そのユトピヤを破り捨てるものである。

私は共產社會、自由社會、而してルソウが云つた『各員の協同の力を以て團體各員の身體財產を防護せしむると共に、協同に參入せる各員は其協同に拘らず、唯自己にのみ服從し、以前と同樣に自由に居ることが出來る』ところの社會の一形式をあこがれる。が然し私はそれを得る道程に、機械に謳歌するを欲しないのである。

プレトウは墮落した人間は只心靈によつて天上の眞理の世界と相通ずる事ができると說いた。新らしき眼を以てプレトウを見よ。此處に於てか、田園への復歸が高調せられねばならないではないか。私は前に述べた、人間は最善の生活を得んとて、都會の眞中に迷ひ込んだ。然らば我々をして、都會を走り出で、新らしき田園へ行かしめよ。それが正しき道なのである。プレトウの眞理世界への交通であり、更に進んでその獲得なのである。迷夢より醒めて現實へ、である。今や我々は此處に達するべきなのだ。

祖母の靈前に捧ぐ

石井雄三

◇

歸へりくれば、淋みしき家に
父と母、線香の薫する
祖母はおわせじ

◇

靈前に、美くしき花を
たむける、夕日は沈む
祖母はおわせじ

◇

ひざまづき、しばし祈る時
燈籠は、しめやかなる
光りを投げる

◇

八十路越え、逝ける祖母は
幸人と、みな月の夜
集いて語れる

◇

去る時に、五圓くれたる
祖母の心、思ひ出暗し
逝ける後にて

一九二五、七、二〇

迷夢より生活の指導原律、人生の本質目的、此の獲得に目覺むる時、その時は我々が田園へ歸る時である。都會にあつて、腐敗と罪惡とに囚はれた時の我々が、而して機械に謳歌して創造を失つた時の我々が、此の原律、目的を、どうして把握する事が出來ようか。大なる先覺者は常に自然の復歸を說く、ルソウは『自然へ歸れ』と呼ばはつた。シペングラアは植物的生活に歸れと云つてゐる。森林に行け、荒蕪の野に戻れ、大地に居て。アンニュイ、疲勞、懊惱の生活を去つて、奮鬪と努力との生活に行け。ロングフェロウは、機械文明の底落におちた米合衆國に生れて、而して、朝な夕な田舍村の片ほとりに鐵槌を振ふ鍛冶屋を、涙を以て讃美した詩人であつた。彼の世界で有名なる『人生讃歌』を讀め

Act-Act in the living Present!
Heart within, and God o'erhead!

かくして人間はその本質目的に抱かれやう。その生活原理に直進する事ができるであらう。本質目的は如何なるものであると、それを定義する事は不可能である。奮鬪し、努力し、それよりして正しく見、正しく考へ、崇高者を想ふ。斯くの如き時我々は生活原理に近づきつゝあるのではあるまいか。哲學する人！卽ち、人生に深き苦惱を抱く人、世界を深く見んとする人、奮鬪し、努力する人、自然に抱かれ、突入し、自然と相對する。哲學する人！私は斯の如き人を斯ゝ名付けてゐる。我々はそれにならねばならないのだ。それが本質目的、生活原理への接近なのである。

私は此の小さな論文を誤りを以て記したのではない。感傷的だと嘲笑せられるかも知れない。極端なユトピヤンだと罵られるかも知れない。そして又、マルキシアンのみを相手にしてゐると批難せられるかも知れない。然し私はその恐らく向けられるだらう所の多くの攻擊に對して辯解するべく、又新らしき一論文を記し始めるであらう。私はたゞ此の小論に於て、凡ての人々の生に、警鐘を、眞理のあけぼのを報ずる警鐘を亂打せろに過ぎないのだ。

◇……水の誘惑……◇

英文典史概論（1）

經三　福本英男

一、序

僚友よ、見ずや——遙く海を距てゝ望む山々の巓の白皚々たるを、吾等今よりして彼の國をAlbionと名づけん、と。まこと之、英國の古き名稱の一ではあつた。Beda傳ふらく、紀元四四九年、チュートン族此國に來り寇し、約一世紀に亘りて其侵入行はれしと謂ふ。此民族は土著のケルト族に代りて一大國民を形成し、Englisc と自稱し、占取せるこの國を Englis-land (The land of the Angles) と命名せり。これ今日の England に外ならず。

われ今より此國に行はるゝ國語の語格の史的變遷を概へて簡單に敍ぶるに際し、世に稀ならぬ一の迷妄を解かんと思ふ。文典が自然科學的存在をなすの事實これなり。電氣は人が之を發見すると否とに關せず昔より存在せし如く、ギリシヤ文典はスラックス出でゝ該文典を編成して始めて存在するに至りたるものに非ず。『文典たる、特定人の規定せる約束の如く思惟する、又迷妄の甚だしきものなり。吾何人と雖も一定の國語を科學的に觀察するに依りて其文典を編み得べし』と言へるガーランダ氏の言や至れり。(Garlanda: Philosophy of language.)

二、基礎概念

言葉 words とは知識及び思想を表現する爲に用ひらるゝ關聯聲音である。此關聯聲音の總體が一定の社會に於て受納せられ、行はるゝ時吾人は之を言語 speech or language と云ふ。同一社會の言語は其地方的差異を呈する、之を方言 dialect と云ふ。扨て文典は其れを以て一言語の支配さるゝ法則其對象とするものにして、文典科學は之を二つに分類し得る。一は敍說文典 descriptive grammar にして他は比較文典 comparative grammar 之なり。前者は一言語の構成要素として言辭を分類し、配列し敍說し、或條件の下に於て其等が蒙る變化を示すを任務とする。後者は言葉の研究を其基調とするものにして前者の範圍を越へ嚴なる事實の敍述に止まらざるなり。それは言葉を分析し溯て變りし變化を檢討し其が本來の原形にまで追求せんと試むるなり斯く謂はゞ言語の生成を取扱ふ。比較文典に據れば言語を分類する方法二あり即ち

一、文典的構造、即言葉相互間の關係を示す方法の特徵に據る分類方法
二、歷史的相互關係に據る分類方法

なり。第一の分類方法は形態學的分類方法 morphological mode of classification と稱せらるゝものにして此に據れば言語は三つに分類さる。

一、單音(孤立)語 monosyllabic or isolating language
二、粘着語 agglutinative language
三、屈折(複音)語 inflexional or polysyllabic language

一に於ては語根は直に言葉として用ひられ何等形態上の變化を蒙らざるが故に、形態的差異ある品詞はこの種の言語には存在せず。支那語はこの最もよき例なり。二の屈折語にありては二個の不可變的語根が結合して言葉を構成し、斯る複合語にありては語根の一は他の其に從屬し其獨立性を失ふに至る。例せば man-kind, heir-loom, war-like 等に粘着的複合語である。此に屬するものにトルコ語、タムル語ハンガリー語あり。興味深き一、二の例證をなさば、メキシコ語に於ける此種の複合語は成句若くは文章に相當するものなり。例せば achichillacachocan は The place where people weep because the water is red を意味し、atl, water; chichiltic, red; tlacatl, man; choca, weep. の各語根の粘着なるものなり。ハンガリー語 Var-at-andot-ta-tok (=wait-and-will-have-you) は you will have been waited for を意味する。斯る言語を話す人民は一般に抽象能力に缺くる所あるは言語其物の的確に示す所なり。三の屈折語にありては語根は接頭語 prefix、接尾語 suffix によりて變化を受く。此に屬するもの希臘語、羅甸語、獨逸語、英語、ヘブライ語、アラビア語即ちインド、ユーロピアン(アリアン)語族に之に屬す。第二の分類方法は系統的分類方法 genealogical mode of classification と稱せらるゝものにして、此方法による分類に於て英語は如何なる位置を占むるやを觀念する爲に此處に極めて簡單なるアリアン語族の表を掲ぐ。

I. Indian. (Sanskrit, Pali, etc.)
II. Iranian. (Avestan, old Persian, etc.)
III. Armenian.
IV. Greek.
V. Italic. (Latin, with its descendants the Romance language.—Italian, French, Spanish, etc.; ancient Umbrian, etc.)
VI. Celtic. (Irish and Highland Gaelic, Welsh and Armorican.)
VII. Slavonic. (Russian, Bulgarian, Polish, Bohemian etc.)
VIII. Baltic. (Lithuanian, Lettish, old Prussian.)
IX. Teutonic or Germanic.
A. East Germanic (Gothic)
B. Scandinavian. (Icelandic, Dano-Norwegian, Swedish)
C. West Germanic.
a. High Germanic (German)
b. Low Germanic (old Frisian, Anglo-Saxon, old Saxon, old Frankish; Frisian, English, Plattdeutsch, Dutch, Flemish)

此表に據りて明かなる如く英語はアリアン語族中のチュートン語族に屬し、且つロー・ヂヤーマン・デイアレクトである。尙吾人は英語は歐洲大陸よりの漂浪民族によりてブリテンにもたらされたる事、English 若くは England なる名稱を此國土と結びつけし用ひ得るは第五世紀の中葉以後に限らるべきを記憶し置くべきである。

三、英語に於ける語格の單純化

吾人は、英語は、形態學的分類に於ては屈折語に屬し、系統的分類に於ては、希臘語、ラテン語、獨逸語等と同族語 cognate language なるを知れり。此點に於て吾人は一の疑問に逢着する。他の屈折語たるグリーク、ラテン、ジャーマン等に比して英語の語格は極めて單純にして、殆ど單音孤立語に近き觀を呈するは何故なるや。本來英語の語格は斯る單純なるものなりしや？否試みは古代英語と近代英語を比較せよ。古代英語の語格の錯雜せる到底今日の其の比ではない。則ち知る。近代英語格の單純は本來的、而るに非ずして時の推移と共に何時しか單純化せられたることを。此現象は決して英語にのみ特有なるものではない。近代ドイツ語は英語に比し其語格遙に複雜せりと雖も古代獨逸語に比ずれば極めて單純なるものと云ひ得る。人は母國語をすら之を修得しなければならぬ。如何に努めばとて一の文法的誤謬も犯さざる程完全には母國語を何人も修得し得ない。種々雜多なる conjugation, declension を有する言語にありて此種の誤謬は、比較的稀に用ひらるゝ語の屈折を、より頻繁に用ひらるゝ屈折に一致せしめることに存する。斯くて、稀に用ひらるべき conjugation, declension は急速に用ひられざるに至るのである。言語に於ける傳統的影響に大なるものあり、文法的單純化への傾向は通常其作用徐々たるに拘らず、特種の原因により促進せらるゝを見る。此の特種な原因中特に吾人の注意に價するもの二あり。一は發音の變遷にして他は、異なる言語、若くは同一言語の異なれる方言を話す諸民族の混淆である。（終）

相撲雜話

桐の花光之助

（三）

相撲の手即ち取り方を四十八手と云ひ又四十八手裏表なとと云つて相撲の手が之れだけに限つたやうに思つて居る人もあるが實際は四十八手や九十六手に限つたものではない

然るに昔から四十八手と云つてゐるのは其代表的のもの四十八だけを拔いて斯は名付けたものであるから記錄に依つては其の名稱さへ異なつたものが數種ある三木愛花先生の『日本角力史』に擧げられてあるばかりでも既に四種あつて何れも半分づゝは異つて居る此他に此四種の中にもなくて現今の土俵で行はれて居る手も澤山あるから、それだけを總括して見ても百數拾手にもなる尙ほ又手捌き八十二手、手碎八十六手、紛手十二手などと云ふことが相撲大全にのつて居て其名稱までも記してある其中には四十八手のものと異名同手のものもあるやうだが兎も角相撲の手は斯くの如く變化に依つて數限りなくあるもので單に四十八手と云ふことは其代表的を擧げたに過ぎぬのであることが分る

扨て其代表的のものと云ふと之れを具體的に說いたのが角力秘要抄と相撲隱雲解であつて反十二手(首を用ふるもの)投十二手(腰を用ふるもの)掛十二手(足を用ふるもの)捻十二手(手を用ふるもの)に分ち原則は反投掛捻の四つに歸納してゐる要するに相撲の手が數十數百あつても此四つから出ることは明かである

右の中で秘要抄の分は餘りに古風であつて名だけではワカリにくいから雲隱解の分を左に揭げる

◎反十二手
向反、居反、撞反、寄反、傳反、撞木反、一寸反、ギボシ反、枕反、鴨の入首、クジヤ反、衣かつぎ

◎投十二手
上手投、下手投、引投、上手櫓、下手櫓、首投、腰投、掴投、寄投、出投、八柄投、手拔の腹投

◎捻十二手
合掌捻、肩透、外無双、內無双、突落、逆捻、クジキ、引落し、出し捻、巻落、頭捻、片手ワク

◎掛十二手
二足掛、內掛、外掛、手斧掛、泥障掛、呼掛、渡掛、タグリ掛、掛モタレ、傳掛、一本掛、水掛

右は比較的に新らしいものであるが斯くの如く現在のものとは異つて居る

角力の手を四十八手に分け之れを投、捻、掛、反の四則に歸納し各十二手づゝを擧げたのは式守蝸牛の相撲隱雲解であつて其名稱は前號に出した通りであるが此蝸牛は相當角力智識を持つて居つたものと見えて流石に能く分類したのである、成るほど角力の手は何百の多きに亘つても其本源を尋ねて見ると此四つより外に出ぬのであり又其働きの要點は投げには必ず腰を用ひ捻には必ず手を用ひ掛には足、反りには首と云ふことも能く要領を得て居るので此外には用ゆる處がないである

然るに之れ以前に四十八手を擧げたものには此四則の區別をつけては居ないで單に四十八の名稱を並べたのみであるから其時に依つて其書に依つて種々に異つて居るのである、中にも近年種々角力のことを書いた繪圖が出版されて居るがその書いた四十八手と云ふものはほんど忘れられた手ばかりが多く之れに當てはめて現在の角力を見ようとしては一向要領を得ぬことになるのである、然らば此多くの書籍に轉載されてある名稱と圖解は何が原本であるかと云ふ之れは今より二百年も經つてゐる寶曆年間に大阪の角力行司が著はした『相撲大全』と云ふ本に載つてゐる圖解を轉寫して其まゝ出してゐるのであるから今日に適合せぬことは申すまでもなく第一其時代には『待つた』と云ふ事がなく行司が軍扇を引くを合圖に立ち合つたのであるから大抵は四つに組むことになつて現今の如く立ち云ひの呼吸を利用して種々に離れた角力を取ることが少ないのである之れがために多く轉載されてある現今の書類の圖解は甚だ時代に不適應となつたものである、今試みに其『大全』に載つて居る圖解を擧げて見ると

鴨の入首、向ふつき、逆手投、掬ひ投、逆投、本手投、褄取り、サマタ、搦出し、手操り、蹴返し、三所づめ、腕捻り、內掛、肩透し、出投、紫首落し、引廻し、蛙掛、丁木反、矢柄投、持出し、ヒサゴ廻し、飛違ひ、膝挫き、大渡し、鴨の羽返し、マカヱ突出し、ツキ蹴返し、外掛、衣かつぎ、手斧掛、突き澤、擦反り、上手透し、しき小また、外無双、四交、素首投、はりま投、掛投、負投、登り掛、櫓、內無双、挫き倒し、とあし、下手櫓などゝ云ふものである

之れを見ても如何に時代離れして居るかが分る

前述の通り現今多く轉寫出版されて居る四十八手と云ふものは現今の土俵の上の手とは名稱の異つたものもあり全然用ゐられて居らぬものもあり其半分は一般の人々の了解に苦しむものであるが之れを區別して見ると

鴨の入首と云ふのは名稱は今の人も知つて居るが此手を取つた力士は明治二十年以來只二回であるとは三木愛花先生の實見談であつて第一回は先頃はなくなつた花籠の荒岩と初代朝汐去佐の山であつて第二回は先代の兩國（今の出羽の海）と鳳（今の宮城野）であるさうだから近年の人には見たものがない。

向ふ突き、褄取り、引廻し、矢柄、ヒサゴ廻し、鴨の羽返し、まがい突出し、つつき蹴返し、突櫓、しき小踏、はりま投、とあしなど云ふのは今日では誰も用ふる人がなく或は用ひた人があるとしても其名が變つて居て今日の見物人には何んの事だか知らぬのである。

ため出しは泉川などと云ふ方が通り名となり、丁木反りなどは殆んど用ふる人がなく、衣かつぎも同樣で、十場所の內に一度あるか無いかである、又右の中で離れて働く手は手操と飛違ひの二手位のもので其他は悉く四ッに組んで取る手である、斯の如く世間に廣まつて居る四十八手の圖解は二百年も昔に『待つた』がなく大底四つに組んだ時代のもので現今では廢物となつたもの丶樣に進步したものや名稱の改まつたものが半分以上に及んでゐるのであるから今の角力を見るには斯る故物ばかりを當てにせず宜しく現今の四十八手とでも云ふ手を研究してから現今の角力見てもらいたいものである。

扨て之れから現今の土俵上に用ゐられてゐる新四十八手とでも云ふものを撰んで講釈を出す考へであるが紙面の都合でそれは別に次號に譲り此所に一寸四十八手と云ふことが何んに依つて起つたかと云ふことを付記する之れは一年を四十八候に分つてあるのに起つたので即ち一年の春夏秋冬の、季が投、捻、掛、反りの基本に當り四季の中の一季十二候あるから此の投、捻、掛、反を各十二手づゝ選んで合せ四十八手としたものである。（つゞく）

沼の面は動かず

花房謙三郎

だらんと垂れた暗い雲をその顏にうつ！
注ぐ水もなく、出て行く川もない。
濁らしい沼の水は動かず。
ガラス張りにしては凹凸があり過ぎ。
水にしてはアンマリ靜かすぎる
死んだ沼の面に、
影をひたしてゐる雲の峰の間から。
プカリと一つ。
小さい泡が浮び出で破裂する。
昨夜身をなげし可憐な乙女が。
ソツとするなげきの息が。
ユラユラと水底に浮び上つたのか？。
沼の面はその果敢ない泡をも消して。
ドンヨリとひる寢をつゞける。
雲の峰は崩れた。
湖底に始まりし人魚の亂舞——
生白き水草の莖は、
何本も何本もつれ合つて。
蛇の爭鬪の如く。
……
しかも沼の面は。
いゝ、チヨツと小皺をよせたきり。
おゝ！
それは何と云ふ懈怠の生活をつづけてゆく沼であらうか……。
一九二五、三、五—

蓄音器を初め
レコード、ピアノ、オルガン
マンドリン、バイオリン
其他どんな樂器でも
御用の節は先づ
銀座の十字屋へ
御相談下さい
良い品を澤山用意してあります
電話銀座五一二七・六九四三

山本勇夫氏著（最新刊）
岡落葉氏裝幀　洋裝箱入美本
定價壹圓九拾錢　送料拾貳錢
小野の小町
千古の佳人小野小町は新人苦心の筆によつて大正現代にみづくしく復活せり！！
美人小野小町の名を知らぬものは天下にない。而も彼女はどこ迄も得體の知れぬ疑問不可解の女性となつてゐる。著者はこの謎の人物を如何にハッキリと決解したか？卓絕した歌人として彼女を、藤原族との暗鬪を、時の御門との熱烈純なる戀愛關係を、悲壯なるその生涯を、如何に深刻に內面的に描出したか？處女の誇りに終始した彼女を、草紙洗ひの、雨乞ひの彼女を、深草小將の百夜通ひを、如何に現代味を以つて取扱つたか？讀者は一讀して彼女の內部生活に共鳴し、彼女と俱に悲み彼女と俱に歎き彼女と俱に惱まないでは居られないだらう。その悲しみその歎きその惱みは春の花の如く美しく秋の湖の如く靜かである。何人の追隨を宥さぬ放膽優雅なる筆趣は文壇稀有の傑作として、斯界を惹起せずには居らぬだらう。久しき沈默を破つて著者が提供したこの藝術を見よ！

在巴里　武林無想庵氏著（最新刊）
岡落葉氏裝幀　洋裝箱入美本
定價貳圓　送料拾貳錢
世界を家として
著者は放たる一面の人間として混沌界裡を常に彗星のごとく彷徨しつゝあり。その筆の運ぶところ、その想の赴くところ漂揚として元より人の捕捉することを赦さず。著者今や巴里の客舍に流寓して如何なる夢をか畫きつゝある？……世界を家として……の一卷、これ自由人たる著者の我々に送れる混沌界裡の秘密な消息である。
發行所　東京市外西巣鴨町堀の內一二二五　（振替東京六四四三〇番）　一人社

暑中御見舞
先學期中は色々と御愛顧を給はり御禮申し上ます
嚴暑も去り御歸校の節は定評の我々組合員に御用命下され度御願上申します
立教校商同盟
中野屋洋服店
小林洋服店
高島屋洋服店
瀧野川堂文房具
並木帽子店
增田洋服店
大塚靴店

ミ　ヨ　イ　セ
暑中御見舞
皆樣の御便利の爲め出來た校內の立教堂も追々發展の機運に向ひつゝある事は皆樣の御引立と深く御禮申し上ます　來學期も種々御入用品を取揃へて御歸校を御待ち申しますればどうぞ芽萠んとする立教堂を育んで御引立下さらん事をお願申し上ます　敬白
一般文房具の
皆樣
立教堂